

風景のダイナミズム

川崎 雅史¹・山口 敬太²

¹正会員 工博 京都大学大学院工学研究科 教授
(〒615-8540 京都市西京区京都大学桂C1, E-mail: kawasaki.masashi.7s@kyoto-u.ac.jp)

²正会員 工博 京都大学大学院工学研究科 助教
(〒615-8540 京都市西京区京都大学桂C1, E-mail: yamaguchi.keita.8m@kyoto-u.ac.jp)

本稿は風景におけるダイナミズムについて、カンピドリオの広場などバロックの庭園や建築意匠および、京都の古庭園の中に共有できる風景の見方を考察したものである。幾何学的な秩序や無限大を表現した理性としてのバロックの空間認識とは異なる情動的なバロックの側面である空間のダイナミズムを、広場の視線の動きを誘導する紋様、背景となる風景との対比の側面から認識した。また、その共通的な見方として、京都の庭園における、庭園の砂紋、自然地形のうねりにみられるダイナミズムを考察する。

キーワード: ダイナミズム, バロック, 借景庭園

1. はじめに

本稿は、特定の風景の中に見られる時には情動的、あるいは衝動的ともいえる大きな動き（動的感情）を感じさせる意匠についての一つの見方であるダイナミズムについて、筆者の風景体験から論じようとするものである。

ダイナミズムという言葉は、一般に人間の動きを表現した芸術や文化の表現として使用されることが多い。本来的にそのものがもつ力強さや大きな変化を表す概念であり、空間や景観の様相を示す概念でもある。

風景が動くと感じる場合、一般には視点である人間の動きによって視る対象が動くように見える場合と、視対象が実際にフィジカルに動く場合がある。後者は例えば自然の風や光によって木々の緩やかな動きを感じたり、川の落水によって水の表情や音の変化を感じとる場合である。

しかし、主体や対象のフィジカルな動きに重きを持たない、その風景のデザインの表現そのものが人の視覚のイメージに大きな動きを感じさせる特定の風景があることも事実である。本稿では、古典的ともいえる風景対象の中からより強く先鋭化した動きの感覚、空間のもつ力強さや衝動的な変化を与える風景をとりあげ、その現象の記述を行ない、その特定の見え方について考察する。

イーファー・トゥアンが物理的な形態と人間の感情に動的な関係が存在する場合、その動詞によって暗示され、景観は「広がる (unfold)」と例示しているように、筆

者は、ダイナミズムは概ね景観の広がり方を意味しているものではないかと考え、それを強調する特定の見せ方を考察することを本稿の目的としている。

そのため、著者が本稿を考える契機となった西欧の建築や広場におけるバロックの風景を起点とし、つぎに地形占地を活かした京都の借景庭園に見られる風景に共有するダイナミズムの感性を論じる。

2. バロックの意匠にみるダイナミズム

2. 1 バロックの起源的意味

バロックは、16世紀末のイタリアから18世紀前半ばまで、ヨーロッパにおいて、彫刻、建築をはじめ幅広い芸術、文化の領域を制覇した様式概念である。バロック的な都市空間とは、パリの都市軸に代表される人間の意志の表象として視線の方向と目標が明確な空間的な秩序による理性的な側面がある。しかしながら、バロックの言葉の語源が「歪んだ真珠」(barroco)が有力であり¹⁾、バロックの本来的な語感の意味には、「何かわけのわからない、ごちゃごちゃとした」ものがある²⁾。森田³⁾が指摘したとおり、これはルネサンスが再生の対象が、正確で規則性のある古典都市であり、キリスト教の感情と思想を古典形式として表現した均整のある冷静なものとは対照的な性格をもっている。それは、バロックのもつ動的であり衝動的な空間の様式が生まれたことを意味している。これらを総括したポール・ズッ

カーは著書「都市と広場」の中で、美術史家であるハイ
ンリッヒ・ヴェルフリンの論文「ルネッサンスとバロ
ック」（1888年）を紹介し、「バロック様式の特徴が運動
の「劇的扱い」と暗示するという考え方が受け入れられ
るようになり、16世紀中頃までルネッサンスの落ち着いた
調和ある優雅さに対立する概念として捉え、これを
著述家が発展させて絵画、彫刻、建築に適用した」こと
を記している⁴⁾。さらに、バロックには2つの起源的
意味があり、その一つはミケランジェロから生まれたル
ネッサンスの静的な形態を誇張、デフォルメし、全体
中の個々の部分を引き立たせ、ヴォリュームとマスを劇
的に強調し表現する流れにあることを指摘している⁴⁾。

2. 2 カピトリーナ広場におけるダイナミズム

バロックの広場の原型ともいえるイタリアのカピトリ
ーナ広場における風景のダイナミズムについて考えたい。
この広場の整備経緯と空間性の評価については、ギーデ
イオン⁵⁾とズッカ⁶⁾が現象論的に丁寧に指摘している
が、それらを踏まえ、ダイナミズムの見方を成立させる
広場の図像的な特徴を、著者の視覚的経験をもとに考察
する。その主要な視点は、静的な風景を背景とした、広
場の紋様に代表される視線の動きである。

(1) 軸性のあるバロックの静的な風景

この広場でバロックのダイナミズムを感じさせる主要
な要因は、台形敷地にある楕円形広場の舗装紋様が中心
的である。もう一方のバロックの見方に相当する静的な
風景は、ダイナミズムを活かすための壮大な背景として
の効果を果たす瞬間があると考えられることができる。

その静的な景観は下記のとおりである。

16世紀の半ば頃、ミケランジェロは、マルクス・アウ
レリウスの騎馬像の移設、周囲の建築、台座と広場全体
の整備計画に着手した。この広場の配置は、中央正面の
セナトーレ宮殿（現市庁舎）と左右のヌオーヴォ宮殿
（現カピトリーノ美術館）、コンセルヴァトーリ宮殿
（現美術館）の建築の位置に沿って形成されており、台
形型の敷地に計画された。

ミケランジェロの計画のとおり（図3）、騎馬像と中央
正面のセナトーレ宮殿の塔、そして、ローマと中世の街
並みを縁取る中央階段へと続く強い軸性が表現された空
間である⁷⁾。さらに、ズッカが2つの宮殿建築に束縛
された敷地と指摘したとおり、軸性のあるバロックの風
景を印象づけるパースペクティブの効果をもたらすよう
に建築のファサードが形成されている（コンセルヴァト
ーリ宮の対面にセナトーレ宮に対して同じ角度となる新
たなヌオーヴォ宮を計画された経緯に基づく）⁸⁾。階
段の彫刻から縁取られるもう一方の焦点の先に見える中

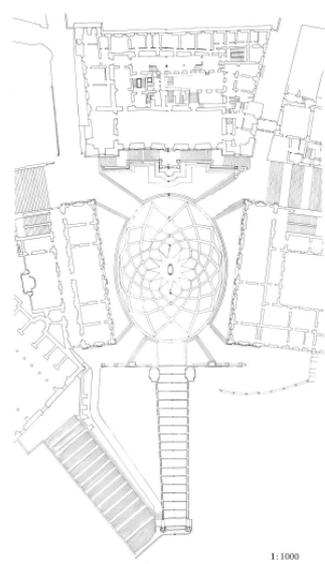


図1 カピトリーナ広場の平面図¹³⁾

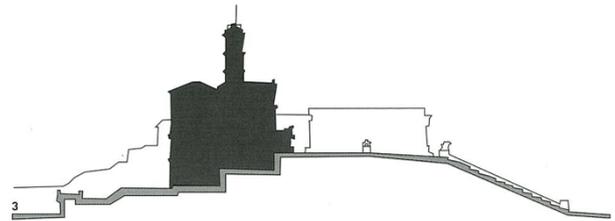


図2 カピトリーナ広場の断面図¹⁴⁾

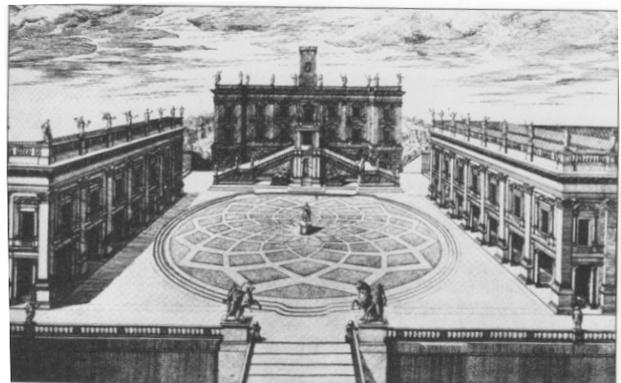


図3 ミケランジェロのカピトリーノ丘の展望¹⁵⁾
（デュペラックによる版画, 1569）

世・ローマ時代の風景もローマへ向かう叙情的な意味は
あっても図像的には極めて静的な印象を与えている。ま
た、アッカーマンは、カンピドリオの平面図は、観察者
へ全眺望の見渡せる中央軸の一点から入るよう強調し
て、瞬間的に視点を固定させていることを指摘している
⁹⁾。ここに展開される風景は物理的に変化を見せるこ
とがあるが、瞬間瞬間で概ね風景のベースとして固定さ
れる認識がある。

このような遠近法的、軸性的な特徴をもつ静的な風景
は、地形条件による見え方によって印象深いものとなっ

ているが、この静的な風景は、ダイナミズムにおける視線の行き先や広がりを与える役割を果たし、バックグラウンドとしての背景を付与している。



図4 ローマの風景に広がる軸線と広場

(2) ダイナミズムの風景 - 紋様の視線誘導-

アプローチの階段を上がって、楕円形の広場の紋様を眺めた時に視線は、紋様の白色のラインによって視線が動かされることになる。ここは明らかに広場のクライマックスであり、ここを訪れる誰もが激情的とも言えるダイナミズムを感じる始点になる。

広場の舗装にある縞模様の帯はマルクス・アウレリウスの騎馬像から掌指状に放射しながら、扁平な相交差する曲線と12尖頭の星状形である¹⁰⁾。ミケランジェロがこの模様のねらいがどこにあるのかを意味する意図を示す文献資料は残っていないが、長尾は、その広場の意匠を、古代ローマ都市の中心の意味から理解すべきと指摘し、天文学や占星術に関する図形に類似しており、天の摂理を表するアッカーマンによる説が有力であると指摘している¹¹⁾。アッカーマンは、このようなコスモロジーの表現が図像の原型であることと、台形敷地における楕円形の解決は画期的なものであったと評し、中央の騎馬像の中心性と広場の縦軸に逆らわないような図形を発見したこと、すなわち楕円が一つの形の中に、「集中性」と「軸性」の二重性格をもつことを指摘している¹²⁾。

筆者が指摘する風景のダイナミズムは次の二点に集約される。

1) 全体形状にみる穏やかなダイナミズム

-円状性と穏やかな拡張-

広場の紋様の全体形が見える視点から見た風景は(図5)、楕円が膨らんで円形状に見えること、そして、外側へ広がる穏やかな動きを感じさせることが特徴的である。

平図面(図1)で形状をみると長軸と短軸の比に歪みがあり、かなり扁平した楕円形であるが、広場にあがり実際に目の高さから見ると、遠近法の効果もあり、楕円

が円形状に感じる。そして、均衡のとれた全体の模様が認識され、中心の12の尖頭から外円へ波のようにラインが穏やかに広がるように視線が誘導される。外円で一度止められるが、中心から外へ向かって広がる図像は、中心から都市への広がり暗示させる。



図5 全体形にみる穏やかなダイナミズム

2) ラインが誘導する伸びやかな跳躍

広場の紋様は、外円の12の接点から中心の騎馬像へラインが集約されている。実際に、外円付近(段差部分に腰掛ける人が多い)からの眺めは、接点から始まる曲線ラインは、星状形の中心に誘導され、尖塔点を経て、尖塔から隣の尖塔点のラインへつながれて視線が誘導される。あるいは、尖塔の手前の交差点から隣の交差点へのラインにつながっていく。このように図像は、接点とラインが跳躍するような動きが誘導される。これは現実的な人の自然な視線の流れに沿った動きと考えられるが、先述の全体形の動きとは異なったリズム感のあるダイナミズムと考えられる。



図6 接点とラインの伸びやかな跳躍

2. 3 バロックにおけるダイナミズム

先述したカピトリノ広場におけるダイナミズムは、図像の広がり主として2次元的な意匠が視線を誘導し、

ダイナミズムの風景を生む対象である。バロックの空間には、建築物や庭園の中にある面や空間がゆらぐ対象もいくつか観察ができる。これらの事例については、発表会にて一部を示す予定である。



図7 バロック庭園（ベルヴェデーレ宮殿）

3. 京都の古庭園における風景のダイナミズム

筆者等は、これまで京都の借景庭園の地形と庭園の関係を観察してきたが、その過程で、清水寺成就院、実相院などにおいて自然地形が生む風景のダイナミズムを体験することができた。そこでの見方は、庭園の砂紋と、山肌の起伏や流れるシルエットが与えるダイナミズムである。バロックの風景との比較を通じて、共通の感覚について発表を行う予定である。



図8 山容のダイナミズム（成就院）



図9 砂紋と借景（実相院）

参考文献

- 1) イーファー・トゥアン, トポフィリア-人間と環境, ちくま学芸文庫, p.70, 2008
- 2) 中島智章, 図説バロック, pp. 36-38, 河出書房新社, 2010
- 3) 森田慶一, 西洋建築史概説, pp. 136-140, 彰国社, 1973.
- 4) ポール・ズッカー, 都市と広場, pp. 216-217, 鹿島出版, 1975.
- 5) S.Giedion, 新版 空間 時間 建築(復刻版), 丸善, 2009.
- 6) 前掲著4).
- 7) 前掲著5), p. 104.
- 8) 前掲著4), pp. 219-220.
- 9) ジェームズ・アッカーマン, ミケランジェロの建築, 彰国社, p. 105, 1976.
- 10) 前掲著5), p. 104.
- 11) 長尾重武, ミケランジェロのローマ, 丸善, pp. 61-62, 1988.
- 12) 前掲著9), p. 112.
- 13) レオナルド・ベネーヴォロ, 図説都市の世界史, pp. 78, 相模書房
- 14) Robert F. Gatje, "Great Public Squares", pp. 83-87, Norton Press.
- 15) 前掲著9), p. 263.